

特集 2

PHSの独自性伸ばし再成長へ

喜久川新社長に代わって3カ月、いよいよウィルコムが動き始めた。MNP導入によって一段と競争が激化した移動通信市場のなかで、どのような進路を切り開いていくのか。また、高速化とWeb2.0の波にどう対応していくのか。ウィルコムが描く成長戦略を探る。

「もともとPHSは携帯電話とは異なるシステム。いよいよその独自性を発揮し、たとえ小さくても確かな顧客基盤を有した事業として成長できることを、これからはっきりと証明していきたい」。

2006年10月にウィルコムの社長に就任した喜久川政樹氏は、こう力強く語る。

八剣洋一郎前社長の突然の退任に、株主カーライルとの事業戦略での意見の違いが原因との憶測がかまびすしい。

だが、喜久川社長はきっぱりと否定し、「会社としての不連続はまったくない。私の使命は八剣さんの経営でスピードアップした事業をさらに推進し、PHSが持っている本来の可能性をもっともっと具体化し、本当に花開かせていくこと」と述べる。

確かに、このほど新たに副社長に就任した土橋匡氏、近義起氏とも、営業・技術それぞれの分野で、生い立ちの前身DDIポケット時代から一貫してPHS事業を支え抜いた人たちばかりだ。

「ウィルコムに変わった04年段階は、まだ3人も若すぎた。今ならもう他社とも十分渡り合っていける」という声もうなずける。

最初の課題はMNP対策

生え抜きの若手経営陣の登場で、ウィルコムは前途洋々ともいえるが、その前に1つの暗雲が垂れ込めてい

る。言うまでもなく、ちょうど新体制発足と時期が重なった、10月24日からの番号ポータビリティ(MNP)導入による市場の波乱だ。

ソフトバンク参入もあって携帯キャリア3社の間では、激しい顧客獲得競争が繰り広げられている。もともとウィルコムはPHS事業者としてMNP対象外だったが、余波を受けて、純増のペースが下がっている。

TCA(電気通信事業者協会)が毎月発表する事業者別契約数によると、ウィルコムの10月の純増数は前月の約半分の3万7800に落ち込み、11月はさらに少ない2万4700にとどまった(図2)。

「成長率の1つの指標である純増がやや鈍化している。それをどうリカバーしていくのか、新体制の直近の課題だ」と喜久川社長は力を込める。

携帯電話に加入者を奪われ、純増を続けていたDDIポケットが米国の投資会社カーライルと京セラに買収され、ウィルコムとして新たなスタートを切ってから約2年。

その間、八剣前社長のスピード経営の下、月額2900円でウィルコム同士の通話とEメール(Eメールは他社携帯電話、PCとの送受信含む)が無料になる「音声定額サービス」、キー

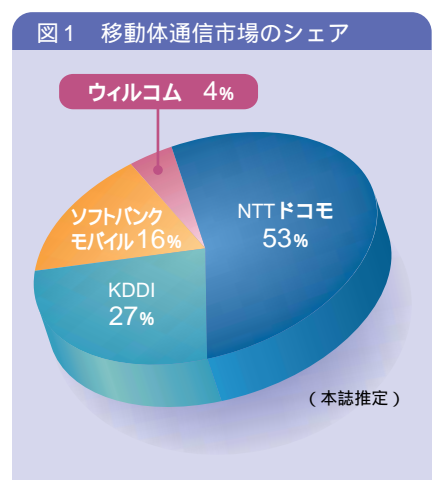
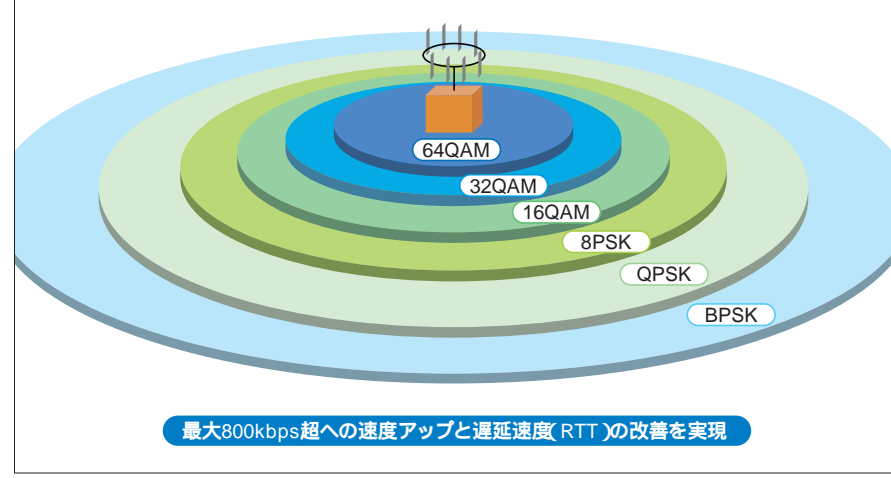


図2 8PSKから16QAM/32QAM/64QAMへとW-OAMは進化



ボード付きスマートフォン「W-ZERO3」に代表される個性的な端末を次々に発表。活発な動きに比例するように順調に加入者を伸ばし、DDIポケット時代からの悲願である400万も突破した。

だが、MNPスタート以降、明らかに、その勢いに波乱要因が見え始めている。MNPの波浪のなかで、ウィルコムはどのようにして次の成長を目指していくのか。

キーワードは独自性

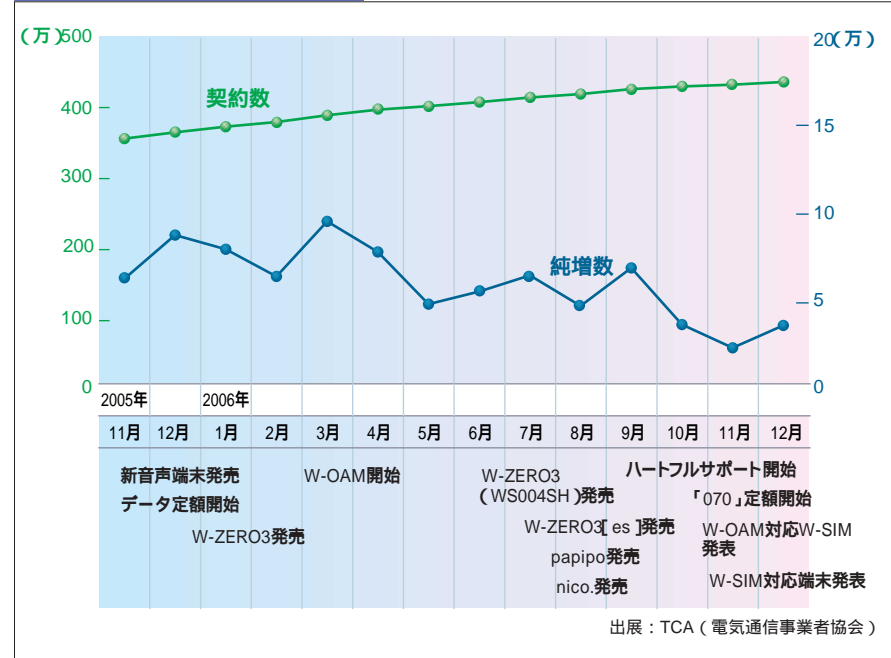
06年12月14日、ウィルコムから新

音声端末「q(nine)」(ケーイーエス製)が発売された。ストレート型で、色は白と黒の2色。余分な機能はそぎ落とし、カメラさえ搭載しないシンプルな端末だが、ビジネスパーソンを中心に早くも人気を集めている。

このnineの最大の特徴は、高度化PHS規格「W-OAM」に対応していること。W-OAMは、電波の状態に応じてより高度な変調方式を自動選択する「適応変調」を用いた技術で、従来のQPSKに加えて、8PSKとBPSKを組み合わせて利用できる。

変調方式をQPSKから8PSKに変

図3 契約数と純増数の推移



高度化PHS規格「W-OAM」に対応した「q(nine)」

えると、2ビット分から3ビット分に送信可能な情報が増えるので、約1.5倍のデータが転送可能。8xパケット通信で、従来の最大256kbpsから、最大408kbpsになる。

この変調方式の高速化に加えて、回線を束ねるMulti RF化、バックボーンのIP化により、07年以降は最大800kbpsまで向上する。

PHSはこれまで、速度の面で携帯電話に遅れを取ってきた。NTTドコモとソフトバンクモバイルが採用するW-CDMAは下り最大384kbps、上り最大384kbps。他方、auのCDMA 1X WIN(EV-DO Rev.0)は下り最大2.4Mbps、上り最大154kbpsを実現している。

W-OAMは、この間の携帯電話高速化競争に一矢報いるものだ。

しかし、数字を見ただけでは、PHSは高速化でまだ遅れを取っているとわざるをえない。それに対して、技術分野を統括する近副社長は